

淨土

1980-1

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一日発行
昭和二十四年四月二十八日 選給省 (特別投承郵政) 第三二五号
昭和五十四年十二月二十五日印刷 昭和五十四年一月一日発行
第四十六卷 第一号



衆 善 奉 行

—『七仏通誠偈』より—

大本山増上寺法主

藤 井 実 応

衆善奉行

増上寺

実応



正 月 号



念仏はこれ本願の行、諸行は
これ本願にあらず。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集 1 P.95)

目 次

<年頭所感>

年頭にあって

一善導大師一千三百年——	藤 井 実 応	…(2)
今年も暁の明星を仰ぐ	林 靈 法	…(6)
神秘的な思い出	宮 本 文 哲	…(9)
仏教の東漸	石 井 真 峯	…(11)
火宅無常	一 条 智 光	…(13)

〇〇新春五句〇〇……………和 田 魚 里…………(15)

法 話

帰依三宝の心	山 本 啓 量	…(16)
老医師との対話	八 木 季 生	…(20)
<童話>やさしい 白い手	布 村 哲 哉	…(26)

サル年に寄せて	今 枝 二 郎	…(31)
浄土句集	一 田 牛 畝 選	…(24)
念仏ひじり三国志⑥——法然をめぐる人々	寺 内 大 吉	…(35)

表紙 土屋正男画

カット 大正大学美術部

年頭所感

年頭にあたって

— 善導大師一千三百年 —



善導大師一千三百年に当る昭和五十五年を迎えました。私共仏教徒として、特に浄土教徒は記念すべき年です。インド釈迦牟尼世尊、中国善導大師、わが国法然上人と三国三代を中心として仏法の正意が開かれ承け伝えられて、今日そのみ教にあらうことができたのです。仏法の起原は申すまでもなく二千五百余年前、インド

大本山増上寺法主 藤井実応

に釈迦種族より聖者出でまして、ブダガヤの郊外菩提樹下にて正覚を成ぜられ仏陀と成られたことにあります。釈尊が正覚を成ぜられた時のことは種々の經典に記されているのでありますが、最も古くできた經典の一として『雑阿含經』の梵天品、「尊重經」には、釈尊は、「ただ正法のみありて、我をして自覚して三藐三仏陀（等正

覺)を成ぜしむ。われまさに彼において恭敬し宗重し奉事し供養し、彼によりて而も住すべし」と合掌せられました。それは三世の諸仏も同じく正法を教へ供養し、住したもうたからであると説かれています。この正法とは、三世十方に充ちたもうみ仏と解すべく、即ち釈尊は三世の諸仏と同じく、正法に合掌恭敬奉事せられ、仏と仏と相念じ、一体の境地となられて、成造せられたのであります。これが仏教の起原であり、それはまた浄土教の起原でありまして、釈尊仏教の正意は浄土教であったといわれる所以であります。

釈尊は後に靈山会上に於て出世の本懐たる『大無量壽經』をお説きになりますが、その序説に、釈尊が仏と仏と相念じたもう仏々相念三昧に入られ、うるわしいお姿をあらわされる御徳がくわしく述べられております。その叙述は全く梵天品「尊重經」とそっくりで、それをくわしくしたものとされます。釈尊の仏々相念三昧より御説法があつて阿弥陀仏の本願が開示されるのであります。浄土教の起原は実に釈尊の成道であると申さねばなりません。

その釈尊の正意は歴代祖師により相承せられて参りま

すが、今より一千三百余年前、中国に於て善導大師により釈尊仏教の正意たる純正浄土教が開顯せられることになりました。即ち阿弥陀仏の本願を信じ念仏申すものは百人は百人ながら、千人は千人ながら悉く弥陀の浄土に生きゆくことができる。最底の愚惡の凡夫も阿弥陀仏の本願力により最高の報土即ち阿弥陀仏の極樂浄土に往生(生きゆく)することができるといふ所謂「凡入報土」の旨を明にし、万人齊しく救われゆく「五乘齊入」の純正浄土の教門を開いたもうたのであります。

わが国に於ては善導一師滅後五百年、今から八百余年前、法然上人により、釈尊の正意、善導の元意を承けられ、選択本願の念仏を弘通し、一切無生、万民救済の浄土の宗をお立てになったのであります。

三国三代、教主釈迦牟尼世尊、高祖善導大師、宗祖法然上人と、その間歴代お祖師方により伝々相承されて、今日、私共は仏法の正意純正浄土のみ教に逢うことが出来ました。逢うこと難くして逢うことが出来たのであります。

法然上人は一切経閲覧の際、特に善導大師の『観經疏』をよろこびぐりかえし拝読せられたが、遂に承安五

年（一七五）春三月（御歳四十三歳）、叡山黒谷の報恩経蔵に於て、「一心専念弥陀名号乃至順彼仏願故」の文に至つて善導の元意をさと、誰も見る人は無かったが、「高声に念仏申すこと数百遍、落涙千行であつた」と、これが浄土宗開宗といわれています。八百余年前のことであります。

上人は「偏に善導一師に依る」と申され、また「仰いで本地を討れば四十八願の法王、俯して垂迹を訪へば專修一行の導師なり」と讃仰されお慕いなされました。

善導大師はその行徳高大、学解深厚、まことに阿弥陀如来の化身であられました。『新修往生伝』等には、大師の崇高な行徳について幾多の事実が伝えております。

因より酒を口にせず、目を挙げて女人を見ず、戯れに語らず、（戒律を厳主に持たれた三十余年別の寝処なく、横に臥せられることがなかった（坐睡せられた）。入浴の外は法衣をぬがず、三衣瓶鉢これを他人に洗わせたこともなく、市民から多くの供養をうけられたが、殆どすべてを仙堂又は仏灯の資に供え、或は他人に与えられた。且つ坐して供養を受けられず、常に『釈尊ですら食を巷に求め行乞せられた、善導何者であるか、どうして安座し

て供養をうけられようか」と申され托鉢行乞をさせられた。暇を生かして経文を写し、浄土の莊嚴を画かれた。その写した『阿弥陀経』は数万巻、その画は三百余に及び、幾多の壊れた寺や塔を修理營造せられたと伝えられています。大師が念仏をせらるるや力が尽きなければやめられぬ、寒中にも汗を流して念仏せられた。禮拜行道怠らず、また念仏申される時、お口より光明が出たといわれます。念仏の信行精神の深き境地の現われであります。このような厳しい自行精進は熱烈な布教伝道となり、人に対しては少しでも法を説き近ずかぬ者の為には色々心を砕いて誘引せられました。長安（今の西安）の光明寺等に信者の方々と共に念仏し行道禮拜を共に修し、熱心に布教伝道なされました。「士女奉ずる者、その数無量なり」と、生存中に載せられた『唐高僧伝』にも記されており、竜舒の『浄土文』には「大師の寂後三年にして念仏は長安に満つ」とあります。

ここに大師の御伝記を述べることはできません。唯ここですの崇高な行実の一端を拝したに過ぎません。私はそのみ教に逢い得た一人として大師をみ仏の化現として恭敬禮拜するのほかにありません。

大師の御著書は『観経疏』四卷をはじめ、『法事讃』二

卷、『観念法門』『往生礼讃』『般若舟讃』各一卷、計五部九卷あり、その何れも大師信念の発露、釈尊の正意をあらわされたものであります。一文一句、光輝き魂をゆり動かす生命の書であります。われら愚悪の身も阿弥陀仏の本願力により念仏申すばかりにて人々と共に、この世後の世、永遠に真実に生きゆく（往生の）大道をお示し下さいました。法然上人はそのみ教を一層明にし、わが国に於て浄土の法門をお立てになったのであります。

法然生人は「天に仰ぎ地にふしてよろこぶべしこのたび弥陀の本願にあえることを」と申され「行住坐臥にも報ずべし彼の仏の恩徳を」と教示されています。報恩の道とは如何なることでしょうか。大師は（初夜礼讃に）、
「自ら信じ人を教えて信ぜしむるは
難中転た更に難なり

大悲伝えて普く化する（教化する）は

真に仏恩を報ずとなす」

とあり、また「定善義」には、「聞て即ち信行せん者には生命を惜まず、急に為に之を説け、若し一人苦を捨て、生死を出る者を得れば是を真の仏恩を報ずと名く」とくわしく教誡されています。宗祖上人は、「浄土宗の学者（学ぶもの）は先ず此の旨を知るべし、有縁の人の為には身命財を捨てても偏に浄土の法を説くべし、此二事の外、全く他の営みなし」、あるいは、「ひとえに浄土を法と説くべし。自らの往生の為には法の器度を離れて専ら念仏の行を修すべし。此二事の外、全く他の営みなし」（十六門記第十）と遺誡せられています。大師の「身命を惜まず」「急に為に説け」との仰せ、上人の「身命財を捨てても」また「行住坐臥にも報ずべし」とのおことば、魂にそめ、心肝に銘せねばなりません。

年頭に当り、共に各々その分に随って精進せんことを願うものであります。

年 頭

所 感



今年も暁の明星を仰ぐ

大本山百万遍知恩寺法主

林 はやし

霊 れい

法 ほう

私はこの一月十七日から二月一日までインド仏蹟巡拝団四十三名の方々にお供して、釈尊にお目にかかって来る。今度が六回目の訪印である。ここ十数年来、インドの大地は私にとっては忘れられない香りの土となり、釈尊への思慕の情は参る度毎に深まって行くのである。

私は長い間、釈尊の仏教、詳しくはいわゆる原始仏教と法然上人の浄土教とのくいちがについて、これをどう受けとったらよいものかと苦しんで来た。微力の私には

中々とはつきり会通が受けとれなかった。また出来たとしても、ただ文字や書物の上だけでは不十分なことであった。浄土の三部経を通して、例えば善導大師や法然上人は、釈尊がこの世に出現になったのはアミダさまの万機普益のご本願をお開きになるためであって、南無阿彌陀仏の念仏信仰こそ釈尊のお心であると尊くもお示しになった。実に私ども不出来なものも、この南無阿彌陀仏の信仰によってこのむつかしい人世に処して、よろこび

を受けて生きて行くことが出来るのである。このように法然上人から善導大師までさかのぼって、浄土教が説かれていて、三部経における釈尊の受けとりは善導さまのご指示によっている。

ところが、当時の私にはここに疑問が生まれていた。

それは、なるほど浄土三部経、特に無量寿経を通して見れば、釈尊はこの世にアミダ仏の生命救済の宗教を開顕なさるためにご出現に相なったのであるが、浄土三部経は歴史的には釈尊滅後の数百年に出来たものであった。

それならば、実際にインドは生まれ、おさとりを得られ、八十年のご説法の生涯を全うせられた釈尊が、実際にミダの信仰をお示しになったかどうかということであった。それに、普通釈尊のさとりのお教は自覚教と言われ、念仏の浄土教は救済教と言われ、常識的にはその宗教的性格が異っている。南無阿弥陀仏の浄土教は釈尊仏教からすれば、どう受けとったらよいのだろう。

浅学の私はこの課題について長い間模索をつづけた、しかも、漸く浄土の三部経、特に無量寿経に説かれている釈尊のこの世にご出現になった意義なるものが、その思想的信仰的な立場から阿含の原始經典からの必然的な

発展であること、善導・法然両祖の浄土教こそ釈尊仏教の中核をなすものであることが解って来たのである。

このような私の受けとりは、単に經典の文字の上だけの会通では不十分であった。それだけでは納得がいかなかった。私は実際に釈尊の国インドの土の上を南無阿弥陀仏と合掌しながら歩いて、肌でもって受けとることであった。あたかも十年前、当時私が日本仏教文化協会長をいたしおり、各宗の僧侶百三十名の仏蹟巡拝団をお連れして、団長としてブダガヤの宝篋印塔前で全国より浄写経の奉納法要を営み、ひきつづいて各地の現地説明を申上げた。以来、私は度々ブダガヤに参上いたす度に、深い感動をもって釈尊の法身にお目にかかりつつ、法然上人の南無阿弥陀仏の浄土教をひろめさせていただくことが、あなたのこの世界にお出ましに相なりました尊いお心でございましたと申上げ、またそう受けとらせていただくことのまちがいでないことを確信させていただいて来ている。

×

×

×

私は昨年（昭和五十四年）一月、ブダガヤの夜明けに、

すばらしい暁の明星を拝した。全くあんな美しい星を見たのは生まれて始めてであった。

五時に日本寺の宿を出て懐中電灯の光をたよりにして、昨夜来の夕立ちにひどく水びたしになった道で大塔の方に向かって、足もとを注意しながら歩いて行った。

大塔の西側に来た私は、そこで眼の前に未だ灰色の空に壮大な輪郭をどっしりと屹立している大塔を拝していた。大塔の大きな基壇の周囲には、信者の捧げた万灯の沢山な光りが、穂波のように美しくゆれていた。まことに神秘的な光りであったそれはインドの各地から、ヒマラヤを越えて歩いて来たチベットから、海をわたり来たスリランカから、日本から、そして世界の各地から訪れた信者の祈りの光りであった。ブダガヤの大塔は、いま国境をこえ、民族をこえ、世界の平安と救いとを無言のうちに告げていた。

そのときである。私はふと、忘れていたように大塔の頂上を仰いだ。空は夜の紫紺の色から、すでに夜あけのうす青色にうつりつつあった。その暁の空を背景にして、さっきから大塔の壮大な聖容がどっしりと黒い陰影をのこして、天空に聳えていた。「ブツダム・サラナム・

ガツチャーミー」(われ仏陀に帰依し奉る) 私はそこに立ったまま、長いあいだ合掌していた。

ふと気がついたのである。全くそれまで気がつかなかったのである。そのとき私は大塔の尖頂の右上高く、中天に大きく輝く明けの明星を見たのである。美しい、実に神々しい。その光りの大きいこと、あたかも紫紺の大海に等しい天空に大きなスターサファイアのきらめきを浮かびあがらせたようである。湖底にしみわたるような清澄な中天に、ぼっかりと大きな星の光りが浮いているのである。こんな美しい明けの明星を見たことはなかった。昨夜からこのウルベラの村をふくめて大きくおそった夕立のあがった朝だったので、この明星の地上への投光が格別に美しいものとなったのであろう。

二千年前、ゴータマ・ブツダは、このウルベラの村のビッバラ樹のもとで、あの星の光りを見つめなされて、いく夜もいく朝も、ここで座られていたのだ。その星をいま東方の一僧徒は、その同じところで大きな感動をもって見つめていた。私の思いは、あの星の光りを媒介として、遠く二千年の古の夜あけを思いつめていたのである。

x

x

x

今年もあの美しい明星を仰いでインドの土の上を歩いて来る。インドの大地に立って、何の文明の武器一つもたぬ、まる裸の人間が、これ一つで生きていける力、そ



神秘的な思い出

凡そ世に運命ほど神秘的なものはない。私は数々の思い出をもっているが、その中で最も神秘的な思い出を一つ示すことにする。

元来思い出は年々歳々年をとる毎に、その影がだんだんうすくなつて、遂には消えて無くなるものもあるが、私のこの思い出だけはその反対である。

れが釈尊の説かれた法の命であるだろう。いささか思想的な表現をすれば縁起であり空であった。そして、それをわが法然上人は一文不知の南無阿弥陀仏とお教えになっている。

大本山善導寺法主 宮 本文 哲

私は日米戦争勃発した、昭和十六年十二月八日は、布哇オアフ島ハレイワ浄土院主任として駐在していた。そのため開戦の当日、米国官権に捕えられてホノルルの抑留所に監禁された。その後、米本土の抑留所に転送されて四カ所の抑留所を遍歴した。先づ第一が加州の桑港、次がオクラホマ州のフォートシル、次がルイジアナ州のリビングストン、最後がテキサス州のクリスタルシチーで

あり、そこで終戦を迎え、昭和二十年十二月十日に、まる四九年と三日目で元の古巣のハレイワ浄土院に送り返された。

抑留所で先づ第一に尋問される事は、「君は日本に帰るか」である。勿論私は、「エース」と答えた。その旨ハワイの家族に伝えられたので、妻は一男二女をつれて米本土に送られ、他の抑留所で私と一所に日本に帰る日をまった。

どこの抑留所でも第一の尋問は前述の如く「君は日本に帰るか」である。これは、お互の国の捕虜を交換するリストを作るためであって、交換はそのリストに依ってなされるのである。私の名は前三回のリストにはあつたがいずれも実現しなかった。第四回最後のクリスタルシチーでのリストには私の名はなかった。どうした事かと私は事務所に尋ねに行ったが、「無いものは無い」と突っぱなされてがっかりした。

一方リストに名のあつた者は喜び勇んで抑留所の門を出た。数日後交換船に乗って日本に帰る途中、シンガポールで下ろされて、軍部の仕事をさせられた。そのうちだんだん戦況が悪くなったので、いよいよ日本に帰る事

になり最も安全な船を選んだ結果、阿波丸となった。それは米海軍がこの船だけは撃たぬと、保証したからである。但し条件として女性は一切乗せない事になり、男性のみ乗って船出したが、途中台湾沖で撃沈され、二千数百名の精霊は、怨をのんで海の藻屑と消えたのである。その様は哀れというもまた愚かなりで、実に悲惨の極みである。

私は戦後数年たって、阿波丸犠牲者の夫人や娘が、又布哇に再来布した時その詳細を聞いて涙を新たにしたのである。そして前三回のリストにあつた私の名が、最後のクリスタルシチーのリストに無かつたのが不思議でならぬのである。若しあつたら、私は五十七歳、伴の輝文は十二歳で、海の藻屑となつていたのである。それが九十二歳までと長生きして、その上大本山善導寺の法主にならせて頂くなど、なんとという有難い事かと、ただただ神仏に感謝して、称名念仏させて頂いているわけである。

最後に、諸大徳各位、新年御目出度御座います。本年も何卒よろしく御願ひ致します。



仏教の東漸

昭和三十七年秋、仏教東漸七十年記念日米仏教文化会議がアメリカで開かれ、私も参加して、約一カ月全米を旅行した。東漸の「漸」は「しだいに進む」と辞書にある。仏教は中国、朝鮮から東漸して日本に紹介された。

その仏教が昭和三十七年から数えて七十年前にシカゴで開かれた世界宗教者会議に日本僧が四名出席したのを日本仏教の東漸と称しているが、少々無理な言いかたのように思える。(関係書類が手元にないので、固有名詞などにまちがいがあるかも知れない。)

前記の旅行から数十年たち、アメリカのこと、仏教関係のこともよくわからないので、昨年六月ハワイ及び米本土へ短かい旅行をしてきた。

大本山光明寺法主 石^{いし}井^い真^{しん}峯^{ほう}

ハワイではホノルルの別院に参拝した。二回目の訪問である。間宮開教総長ご夫妻には大変お世話になった。総長さんご自身で車を運転して国立墓地をはじめ各所をご案内して下さったことは恐縮至極であった。ホノルル到着の翌日が日曜にあたったので、日曜法要に参列し、一般の信徒には日本語で、若い方には英語で挨拶する機会を与えられたことは有難いご縁であると感謝した。夏の施餓鬼会にご使用の超特大(厚さ一寸、長さ九尺くらい)の数百本の塔婆を見せて頂いた時は、これは大変な大法要だと驚いた次第である。藤花教道元総長さんご夫妻の私邸へのご招待も心から感謝した。浦上憲成師の数日にわたるご案内にも厚くお礼申し上げる。その他別院の皆さんに厚く感謝する次第である。

ハワイの島々の、すべての浄土院へ参拝したいのは山々であったが、これは健康の上からも、また日数の点からも不可能であったので残念ながらマウイ島だけ訪問した。マウイ島にも二泊三日の滞在で、カフルイ浄土院の新保義道師、ワイルク浄土院の今村諱全師、ラハイナ浄土院の原源照師ほか信徒のかたがたには大変なお世話になった。三カ寺とも立派なお寺で全く予想しなかったところである。三師とも在留邦人の精神的柱としての役割は極めて大きいものがある。私ならびに供の者に対するご厚情に対してはお礼の言葉もない。

マウイ島から再びホノルルへもどり一泊し、ロスアンジェルスへ飛んだ。空港の混雑のなかで浄土宗教学局長古屋道雄師にお会いできたのは奇遇というほかない。ロスアンジェルスでは北米浄土宗別院へ参拝した。河合了勝北米開教総監にはホノルルへご旅行中で、そちらでお会いした。別院では故野崎靈海師夫人、北川順也師ほかのかたがたにお会いした。別院へは昭和三十七年渡米の折参拝したことがある。野崎夫人は、英語にすぐれた人を送って貰いたいと力説された。

ハワイに於ける浄土宗は一八九四年に各宗にさがけて仏道を開始したと伝えられている。それから今日までには、歴代の開教師各位のご苦勞と努力は並々ならぬものがあつたにちがいない。心から敬意を表する次第である。

短かい滞在中にはわからなかったが、一世の邦人は非常に少ないようである。ホノルルの別院で九十二歳になる婦人信徒にお会いしたが、一世の長老であろう。二世のかたは日本語も英語も両方自由だと考えるが、三世、四世のかたは英語でなくては通じなくなるのではあるまいか。ここに一つの問題があるように思われる。

ホノルル別院では浦上憲成師による英文の日常勤行式のほか、たくさん和英両文のパンフレットが出版されている。

またカフルイ浄土院新保義道師及びラハイナ浄土院源照師によつて数種類の英文仏教書が出版されていて、明日のハワイ仏教のために大きな貢献をされている。その他の浄土院でもそれぞれ同じような活動をされていると察せられる。

私は宗教大学（現大正大学）を中途退学し、他の大学で英語、英文学を専攻の後、滞米四年、州立大学で英語、英文学を専攻し、帰国後寺院住職のかたわら国立大学に奉職し、定年退職した。そういうことから日本仏教の英語による海外伝道に関心を持っている。ハワイに於ても、アメリカ本土に於ても、アメリカ人に一層仏教を伝えてもらいたいと思うが、これは容易なことでない。そ



火宅無常

こで英語が国語になっている日系三世、四世の優秀な青年で、仏教の伝道に志を持つ者を求め、一宗の費用で、日本に留学させ、日本語と仏教を身につけてかえし、活動して貰いたいと思う。日本の受け入れ体制も整えねばならぬ。留学生の人員も増加させねばならぬ。いろいろな困難はあるが、日本仏教、特に浄土宗の東漸はわれわれの使命であると信じている。

大本山善光寺大本願法主

いち じょう ち
一 条 智 光

新年おめでとうございます。

新年早々私ごとになりまして恐縮でございますが、昨年八月二十三日夜突如当山において火災を起し沢山の方々にご心配をおかけして、真に相すまぬことでございます。全国津々浦々より温かいお見舞を頂きましたこと有

難く紙上をお借りして厚く御礼申し上げます。

火事によって教えられた事は一人の力の如何に微々たるものであるかと云うことであり、又多くの方々の即ち集の力の大きさであります。多くの方々の善意あるお力によって、ご本尊を始め仏菩薩さては什宝類をはこび出

され無事を得たこと、翌日泥にまみれ水に浸りました所を清掃され元通りお納め頂いた時の有難さ、唯々感謝あるのみでありました。今一つ物にも命の長短のある事を眼のあたりにさせられた事です。当日買い求めて当日灰になったもの、比較的大丈夫ではないかと思われた石や鉄、銅などで出来た品が無惨な姿になったもの、ひとかけらも出なかったもの、当然跡形もなかつたものと思われた布製品の小さいものが完全に無事であつたり、様々の現象を見せられて、物にも命の長短あることを知り、どのような小さい物でも大切にせねばならぬとシミジミ思いました。同時に一瞬一瞬の貴さ、一日一日の得難さを思い、悔いのなきものでありたいと存じます。

あの猛火で総てのものが焼き尽されてしまい、翌朝その余煙のたちのぼる焼跡に立ちました時の悲しさ、恐ろしさを今もなお忘れることは出来ません。先祖以来伝わった品、再び入手出来得ないものの失なわれた事に思いが至った時、申訳なさに自らの業因の深さを慚愧懺悔するのみであります。

かの中国の善導大師様は「この世は火宅無常なり」と申されましたが全くその通りです。一生のうちには、ど

のような事に出あうか計り知れない私達です。悲しみも、苦しみも、苛酷なことも、正しく受けとめて忍んで乗り越えねばなりません。

さりながらみ教えの如く、私共には久遠の昔より三毒の煩惱と云う猛火^{ほむら}瀕りに燃えて、常に身口意の三業に罪を犯しております。何事もなかなか云うべくして、行い難く、心のなやみ除き難しと云うところですが、み仏様のみ教えを受ける幸せを喜んで、早く煩惱の炎を消して参らなければなりません。

歌人税所篤子さんは、

法の水注がざりせば燃えやすき

胸の炎をいかに消へやし

と詠まれました、み仏様のみ教えこそ私共の生活を浄化調整してゆく大切なみ教えであります。私共はみ教えを頂く幸せを喜ぶと同時に、身口意三業を整えて、反省によって進歩し、懺悔によって向上へと歩みたいものであります。そして総ての苦難も仏道修行なりと受けとれるまでに精進致し、誇りを持って正法宣布の一役を全う致したいものであります。

台掌

新春五句

普賢菩薩の白象の如き大根哉
 悴む様神にも見せぬ心哉
 寒拾の焚火鑑賞はじまりぬ
 冬の堇こんな所に泣いてゐる
 秋雨と春雨と重ねたるお正月

普賢菩薩の白象の如き大根哉

和わ
 田だ
 魚ぎょ
 里り



帰依三宝の心

やまもと けいりょう
山本啓量

(石川県立農業短大名誉教授
小松市法界寺住職)

新春を迎え帰依三宝の心を願みたい。三宝とは仏法僧の三宝の事である。釈尊が聞法の弟子達に説法せられた時には、三宝に帰依せよと結ばれるのが常であった。

今、三宝について思い起こすことは、年頭に当って仏前にお供えする時の三方である。漢和辞典によれば、三方というのは三方向に穴があけられているので、三方と言われると書かれている。けれども実際は三方向に擬宝珠の穴があけられているのである。遠い昔には、三方向に四角の穴か丸い穴があけられていたかも知れない。それが後に年を経て宝珠の穴に変わったものと言うことが出来

る。三方の穴が三宝を形どる穴であるならば、仏前に供える三方は帰依三宝の心で供えるものと言わねばならない。

擬宝珠は三宝に用いられるのみではない。橋の欄干にも、庭の石灯籠にも用いられている。宝珠は摩尼宝珠と称せられ、如意珠と訳せられ、意のままに人生に幸福をもたらす事を現わしている。地藏菩薩は如意宝珠を以て一切衆生を利益し、如意輪観音は如意宝珠を以て一切衆生の意願を満足せしめられる。橋の欄干の擬宝珠は罪惡生死の此岸より、欣求浄土の衆生をして彼の岸に至らし

める事を表わすのである。石灯籠は寺の門から本堂に至る間に置かれている。門は出入の義を表わし、入るは衆生が往生浄土の義を知らされる事であり、出づるは弥陀の本願を体得して世間に出る事である。本堂に至る迄に設置された灯籠の火の輝きは、弥陀の慈悲の光明である。本堂の仏事と灯籠火の輝きと出入の門は、各々仏法僧の三宝を表現するのである。

灯籠の石の積み重ねは、台石から上に至るまで地・水・火・風・空の五大を表わしている。雑阿含には地は固いもの、水は冷いもの、火は熱いもの、風は柔らかいものに名づけられ、人間は地水火風の四大から成り、之を包むものが空大であるとせられている。空は虚空の事である。又この四大について考察するに、地は食物を生産し、水は甘露の水を意味し、火は身体が食物と水によって活動的な事を表わし、風は心の柔軟なるを表わすのである。石灯籠の擬宝珠は人間存在の全体を包容し、宇宙の広大なるを現わすのである。虚空の広大なるを単に存在論的に考えないでその作用性から考察すれば、虚空は我見我慢我執を空すると言う義とならざるを得ない。

浄土宗の勤行は三宝礼が初頭に置かれ、最後の三唱礼

は帰依仏、帰依法、帰依僧の心の表現である。読誦し奉る經典の教法は、仏法僧の三宝の内容を総括するものである。

仏は和語によればほとけであり、仏陀は梵語や巴利語の音訳であり覚者の義である。ほとけとは、貪欲・瞋恚・愚癡の根本煩惱に基く百八の煩惱によって縛られている心が、ほ、ど、けるの意味である。百八の煩惱と言うのは、眼耳鼻舌身意の六根とこれに対応する色声香味触法の六境から苦・楽・不苦不楽・喜・憂・捨の六種の感情が生ずる。そうして楽と喜とに相應して貪欲が起り、苦と憂とに相應して瞋恚が起り、不苦不楽と喜にも憂にも属せない無関心を意味する捨に相應して愚癡が起るとせられる。六根六境の各々から苦・楽・不苦不楽・喜・憂・捨の六種の感情が生ずるから、合せて三十六種となる。それが過去・現在・未来の三時にわたるから、これを三倍して百八の煩惱となる訳である。

百八の煩惱は我々人間の四苦八苦の根源となり、地獄の苦思を与えと言うので、この三種の煩惱は地獄の鬼に喩えられる。貪欲は欲が深いと言うので、深い海の青い色をとって青鬼である。瞋恚は怒ることであり、い

ると言う字には忿怒や瞋恚の外に忍もあるが、それぞれいざあがる。いざどおるの義であつて、赤い顔をして怒ると言うので、瞋恚は赤鬼を以て代表せられる。これ等の文字には、すべていかるについての意味が含まれてゐるが、中でも忍は刀で切るぞと言う意味を持つのであつて、刀で切るぞと言ういかりの心をおさえると忍になるのである。忍は堪忍と熟して、仏教では忍は悟りを開くと言う解脱の前提を意味する。愚癡は物の道理をわきまえないと言うので、黒鬼を以て代表せられる。

一切の人間苦は四苦八苦の称せられ、生老病死を四苦とし、求不得苦、怨憎会苦、愛別離苦・五盛陰苦を合せて八苦とし、その本を尋ねて無明又は愚癡に基くとせられる。癡はまた痴とも用いられる。正しい疑いや知るは真理の追求や学問の探究には欠く事が出来ないものであるが、人の誠心を疑ったり誤った判断の知り方であつたならば、その疑や知は病をうけた愚癡や愚痴でなくてはならない。

仏とは貪瞋癡の三毒の煩惱が滅して、その究竟を極めた清浄の極致を言うのである。阿弥陀仏は無量寿仏、無量光仏と称せられる。これは阿弥陀如来の凡夫衆生に對

する往生浄土への慈悲のご加護を表現するものである。攝取不捨の光明は、往生浄土のころを知らしめ給う如来の慈悲である。弥陀の本願力に乗じて称名念仏する者を、仏はそのまま浄土に往生せしめ給う。無量寿即ち弥陀の永遠の生命に攝取して浄土に至らしめるのである。

無量寿經によれば、無量寿の威神光明は最尊第一であるとして、十二光仏を挙げているが、この光明の中で我々凡夫衆生の煩惱滅尽の為に、直接に影響が及ぼされる光明は、清浄光明と歡喜の光明と智慧の光明でなければならぬ。中でも清浄光明は、凡夫衆生が貪欲の為に汚染せられた地獄の鬼の心をご照明下さるのであつて、この光明に浴すれば、地獄の貪欲の青鬼は仏心に変えさせられるのである。また歡喜の光明はよろこびの光明である。瞋恚の心は人生における感謝の心がない為に真赤な顔となつて怒るのである。如何に悪業を積み重ねた凡夫なりとも、仏の本願を信じ打ちまかせて称名念仏すれば、阿弥陀仏の歡喜の光明に包まれ感謝の心を生じ、赤鬼が仏心に変えさせられるのである。愚癡邪惡の凡夫衆生は、過去を顧み現在に執られ未來にあこがれて、この愚癡の黑暗によつて悩み苦しむのである。この愚癡の

黒鬼が本願の念仏を称えることにより、如来の智慧の光明に照らされて、仏心に転向するのである。

法はダルマと称せられ、音読によって達磨と言われる。ダルマは人生規範の義であって法律とも熟するのである。和語の達磨は七転び八起き、人生を正法によって生きる者は決して倒れない。従って達磨は煩惱を克服して、人生の遠い旅路の艱難を乗り越えて行く姿である。

法と言う字は、水に去ると言う字を添えたのである。これは貪瞋癡の三毒の煩惱を水に流すと言う心である。私共が何かの間違いで争いを起こしても、よく互いに話し合ってみれば何事でもない気が付いた時、「水に流しましょう」と言うのである。この水に流すと言う心が、法の義であると言わねばならない。腹立ちの心を水に流すとき、歡喜の心が沸き上るのである。歡喜の心は感謝の心に通ずるのである。これが仏の光明に包まれて、人生のまことを知らせて戴く事である。清淨光明は、貪欲という邪惡な鬼心を仏心に転ずるのである。清も浄もきよいと言う意味である。清は水に青を配し、青は東方を意味して太陽が地より出て来る義であり、未だに混濁がないのである。また浄は争い心を水に流し去るの義でな

くてはならない。従って法は如来の衆生済度のお力を現わすものと言わねばならない。

僧はサンガと称せられ本来は和合社会の意味である。

家庭内で誰か一人が腹立てて怒ったならば、その家は破壊せられるのである。地藏尊に礼拝する時の真言はオンカカーカビサムマニソワカと称する。これはニコニコして腹立てないようにと言う意味である。ハハと笑う事を詞々大笑と言うが、梵語の発音は力行はハ行に通ずる。母はニコニコと言う言葉であり、カカ如来は一家の主婦がニコニコ顔で家中が和やかに成ることを言ったのである。腹が立っても愚癡が沸いてもそのまま、お念仏すれば家内に和合社会が実現する。和合社会は人間社会だけではなく、動物が呼吸作用を行えば、植物が炭酸同化作用を行い、酸素と炭酸ガスが交換されて、人間が公害を起さぬ限り、地球上の一切の生物が平和な共存生活を維持するのである。これが僧宝である。

娑依三宝の根源となるものは称名念仏の心でなくてはならない。仏の本願に打ちまかせて称名念仏すれば、罪惡生死の凡夫と雖も、彼の仏の本願力に乗じて皆共に彼の国に往生することが出来るのである。



老医師との対話

やぎしょう
八木季生

（東京教区教化副団長
浄土宗布教研究所主事
東京・千石一行院住職）

私は人も知る寒がりである。冬になると人一倍いろいろ着込むのだが、それでもよく風邪をひく。風邪をひいたなと思ったら、先ず行きつけの小児科の医者所へ行く。いい年齢をした大人が小児科でもなからうが、近くに内科の医院もあるのだが、何かにつけて小児科へ行くのである。この小児科の先生はもう八十才を越す老人で、大正末期に東大の医学部を卒業した卒業証書が診察室の壁に掛けてある。診察室の机の上には聴診器と注射器と、脇に小型の古い消毒用の煮沸器があるだけで、あたりを見回しても医療用の道具は見当らない。本棚に本が並んでいるが、総て先生の趣味の絵に関するものばかりで、医学書らしきものはこれも見当らない。診療方法

は決っていて、胸と背中に簡単に聴診器を当てたあと、昔ながらに体に手を当てて上からポンポンと二度程叩く。最後に喉を見て「あ、少し赤くなってますね。ただの風邪ですよ。暫く温かくしてれば直りますよ。二三日お風呂には入らないほうがいいでしょう。」こう言っただけの古い煮沸器の中から注射器をとり出して何やら注射をしてくれる。あとは隣りの暗い調剤室で乳鉢の中の粉薬をかきまぜて、三分位の薬をくれる。この薬袋の上には書く名前が最近では仲々思い出せなくて苦労するようであるが、十年一日の如くのお決まりのコースで、薬も昔と変りがない。こんな簡単なことだから診察費が安いかというと、保険を扱わないから決して安くない。そして診

察費だけは時代相應に値上りしている。この近代設備の何もない、そして日進月歩の近代医学と程遠い年寄りの先生に、高いお金を何故払って一本の注射と昔ながらの粉薬を貰いに行くのかと言うと、この薬が私の体にあるのか不思議とよく直るのである。又この老先生に対する不思議な信頼感が足を運ばせるのかもしれない。この老医師は病氣の本質を知っている。従ってどんなに時代が変化し、医学が進歩しようとも、対象となる肉体の構造や機能に進歩や変化のない限り、副作用を起し易い新薬を用いるべきでないし、特異な症状が感じられないのに新しい診察法や検査は必要がないと言うのである。

この医者が或る時私にこういう話をした。それは現在用いられている満年齢での年の数え方は間違っている。在来の数え年での計算方法のほうが正しい。生まれた時が○才で、満一年経って誕生日が来た時に始めて一才になるという現在の満年齢での数えかたは、医学的にみても矛盾している。何故ならば、オギャアと生れた時がその人間の生命の始まりではない。生命の始まりはオギャアと生れる十か月前、母親の胎内に受胎した時に始まっている。母親の胎内での十か月を考へるならば、生れた

時を一才とする在来の数え年での年齢の数えかたの方が合理的で、医学的にも理に叶っていると思うのだが、仏教的に考へてみてどうでしょうかと言うのである。なる程そう言われてみれば、お正月が来ると年をとるという在来の年齢のかぞえかたを除くならば、数え年での年齢のほうが理に叶っている。要は母親の胎内での十か月間の生命活動をどう受け止めるかによって、満年齢と数え年との意見の相違が出てくる。近代科学的合理性に従うならば、オギャアと生れて肺呼吸が始まり、へその緒が切断されて母体を離れ、完全に一個体となった時を生命活動の始まりと考へるのだろう。而し母親の胎内に於ける十か月の生長なくしては母体を離れてからの生命活動はあり得ないのだから、胎内での十か月、約一年を個体の生命活動と考へての数え年による年齢計算の方法は、近代科学という魔術的な言葉、現代人がややもすると誤りを犯し易い盲点を補ったうなづける考へかたである。

この母親の胎内での十か月間を、仏教的に考へたらどうなのでしょうというのが、この老医師の私への問いかけであろう。そこで私はその医師にこう答えたのである。お釈迦さまの教えたの中に、人間の年齢の数えか

たまでのお示しはないと思われるが、母親の胎内での十か月間を、個体の生命活動と考える点に於ては先生の考える医学的生命論と同じであるが、その十か月間を先生の考える凡そ一年とは考えず、凡そ十万年か十億年位にお釈迦さまは考えている。人間の場合、母親の胎内に十か月間存在するが、この十か月間に於ける成長発達を考へるならば、地球上に現れた単細胞の生命体が何億年かかって進化発達して、万物の霊長たる人間まで成長する全行程を経てくるのだから、母親の胎内での十か月は、単なる我々の考える十か月ではなくして自然界に於ける十億年位に相当する。だから胎内の十か月を凡そ一年と考える先生の考えかたを別とすれば、生命活動の出発点ということではお釈迦さまも先生の考えかたに賛成するでしょうと笑いながら答えたのである。この先生は診察は簡単に十分位で済ませてしまうのだが、話し出したら相手が患者であることを忘れてしまう。そして患者が熱があろうが腹が痛かろうが、自分が聴診器を当てたとたんに熱も腹痛も直ってしまうと思っているようである。老医師は私に続けてこう語りかけてきた。もし母親の胎内での十か月が十億年に相当するとして、それでは人間

は生れ落ちたとたん一年は一年としての自然律の法則に支配されるのか、と言うのである。そこで私はせっかくの注射もふいになるかと思いつつ、かすかなぬくもりのパネルヒーターだけの寒々とした診察室でこう答えた。

母親の胎内を離れた肉体は、自然律の法則の支配を受けるから、自然界の一日は一日として肉体は成長もし、又或る時期を過ぎてからは衰えもする。而し母親の胎内を離れたとは言っても、大宇宙を身とし心とし給う如来の胎内に存在するのだから、自分が如来の胎内に存在しているという状態を保ち得る方法を知り、且つその方法を実践するならば、その時は母親の胎内にあって、親とへその緒を通じて成長発達が成された如くに、如来を親とする親の育てを受けることができる。この自然界に生きる我々が、同時に又如来の胎内に存在するということ、徳本行者はこう言われている。

ありがたや 天はかさなり 地は足駄
たとひこけるも 六字の上に

又、

迷いから 地獄や餓鬼は あるものの

十方法界 弥陀のふところ

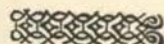
更に母親の胎内に於ける十か月間の成長が、自然界に於けるところの十億年に相当する変化と発達とをした如く、如来という親の胎内に於ける成長は、自然界に於ては考えられない不思議な成長を遂げるものである。この如来の胎内にあって、へその緒を通じて成長するという状態は、法然上人の教えによれば念仏という手段によってその目的が達せられる。念仏ということとは、未発達な自己と親とを結びつける唯一絶対なるへその緒である。次元を同じくする人間の親子ならば、言葉によって通じあうことができるが、次元を異にする如来と衆生との間に於ては、人間的言葉を通じての結びつきでは不完全である。人間の親子でも言葉で通じあうことのできなかつた間は、へその緒という特殊な媒体を必要とした如く、如来と未だ通じあう次元に至らぬ衆生にとっては、念仏は如来と通じあう唯一の方法であって、念仏による如来

と同次元までの育ては、宗教的進化論である。この点を弁栄上人はこう言っておられる。

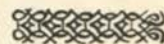
「地球に未だ高等動物を保育する設備の備わらなかつた間は、アメーバのような極少の生物を発生するに過ぎなかつたが、このアメーバとても如来の法身より受けた状態があつたから、外界の状態と共に進化発達して、遂に幾多の健闘と無数の階級を経て、遂に今日の人類となり、人類も又原始的不完全な状態から漸次完全な状態へと進化してきたのであって、動物進化の目的は、もしこれを宗教上の立場から言えば、生理的機能即ち肉体は手段であつて、本来の目的は精神の上に永遠不滅なるものを獲得することにある。動物の中に天然の性を発して衝動を感じ、人類に至つて理性と仏性とを開発し得る可能性を有するに至つた。教育(科学)は理性を開発して事理の是非を判断し、宗教はその奥底に仏性を開発して人類最後の目的である神と致一させようとするのである。」

この辺まで話が進んだ時は、次の患者の到来を知らせるブザーが鳴つたので話はとぎれてしまつてゐる。老医師が私の話をどう受け止めたかと聞く機会は、風邪ひきのシーズンであるだけにそう遠くはないと思われる。

浄土句集



一田牛畝選



評 火事騒ぎもおさまって何事もなかった
ような夜の静けさ。そんなことにかかわ
りもなく、虫は鳴いているのである。

大逆縁ただ愕然と虹も見ず

京都 安藤 寛

木の実降る斉明陵にひざまずく

福岡 高良 慈風

長き塀つづく寺町無月かな

東京 細田 初枝

評 作者は京都嵯峨の薬師寺の住職。その
あと、の京都大学出で、すぐ其の講師
となられる少僧都の一人息子の突然とし
て死亡されたその逆さまことの驚きは、
嵯峨野の空の虹が束の間に消へたる如
く、眺めたくないの心境をよくまとめて
居られる。

評 斉明女帝は新羅との戦に、筑紫の朝倉
の宮に西下されて陣歿された。その陵に
膝まづけば、木の実が降って来て寂淋た
るに違いない。女帝の皇子が天智天皇で
母追善のために筑紫の観世音を建立。

菊の供華山鳩鳴ける父母の墓

滋賀 松尾 郁芳

嵯峨野の空の虹が束の間に消へたる如く、眺めたくないの心境をよくまとめて居られる。

母の忌に母の好みし菊膳きくぜん

東京 栗原やえ子

なにやかや心せかるる老の秋

東京 新井 新生

秋彼岸父のことなど母ぼつり

東京 鈴木 葉子

秋時雨朝に門主の訃音ふしぎかな

大分 丹羽 難中

評 若い時は自分の事のみであったが、年
を取れば取るにつれて他人ことの世話が
急しいばかりで、秋ともなれば尚更だ。

解禁日銃声ひびく鴨の沼

福岡 荒牧 還愚

評 浄土宗八千カ寺の悲しみである、私も
十二月二日、総本山知恩院の表葬の座に
侍り、「御門主の訃に八千の心寒し」と。

火事騒ぎおさまり虫の夜となりぬ

東京 栗原とも子

寺町の今日賑わえる秋彼岸

福岡 原 敬二郎

三重 山田 うた

城跡に人影もなく銀杏散る

照らされて夜空に浮ぶ秋の城

東京 真野 竜

海の香の風に涼しき無人駅

東京 小笠原香梓

福岡 服部 光代

数珠玉の刈られて広き川となり

花煙草薩摩訖の懐しく

東京 真野よし子

いせいよき祭囃子の夜更けかな

東京 末常てる子

福岡 権藤みさを

櫓田の尺なす伸びや天草路

鶏頭の俯向きがちに庭の隅

東京 阪入 等達

襟巻に悲悲の思い出重なりぬ

群馬 島津 か寿

山形 松田 光替

菊日和そろひ袈裟かけ開山忌

紅葉谷降り込められて尼寺へ

山口 三井 寛静

病む心弥陀にまかせて木の葉髪

福岡 上滝津弥音

福岡 高良 幸代

秋の夕浄土の雲と拝みけり

底紅の一つ残りし寺苑守る

三重 森 静枝

風邪声を押し晨朝を勤めけり

東京 吉田ゆきゑ

福岡 江上 樺村

お十夜も新発意まかせ入院す

客むかへ話のつきぬ秋の雨

東京 吉原登起子

柿の木に登り親子のちぎりをり

山形 松田 允子

埼玉 佐久間愛子

冬仕度切れ味のよき鉄買う

入院を待つむなしさやちろ啼く

東京 田中 秀代

香煙に包まれ在す十夜仏

山口 上野 明達

東京 島居 千代

信濃路の山並高き林檎園

裏山の木の葉舞ひくる野分かな

東京 阪入志津枝

年忌メモして檀越へ初曆

一田 牛畝

やさしい白い手

布村哲哉ぬむらてつや

お正月の空から、雪はまいおります。
雪のこどもたちは、歌をうたいながら、おりてきま
す。

踊りをおどりながら、ふつてきます。

屋根の上で、おどります。

木の葉の上で、うたいます。

お地蔵さまの、丸い頭に、つもります。

池へおりた雪は、水になっておよぎます。

自動車の上へおりた雪のこどもは、自動車といっしょ
に、はしります。

あっちも、こっちも、どこもかしこも、雪の国になっ
ていくのが、雪のこどもたちにはうれしいのでありまし

た。

雪の国が、うれしいのは、雪のこどもばかりではあり
ません。

人間のこどもも、うれしいのです。

「わあー、雪だぞ、雪だぞ。」

しんちゃんは、外へとび出すと、もう雪のおだんごを
つくって、雪がつせんです。

あとから、とんで出た、きよみちゃんも、

「わあーい、わあーい、雪のこども、かわいい雪のこど
もだ。」

といいながら、はっぱの上の雪をかきあつめて、丸いお
だんごをつくります。

おさとうのついた、おだんごです。

なめてみると、つめたーい、おだんご。

白い、おいしい、おだんごです。

手にもっていていると、つめたくなりましたので、ビニールの袋をもってきて、雪のおだんごをいれました。

きよみちゃんは、おだんごを袋へいれながら、きよねんの雪の日のことを、おもいだしていたのです。

その日も、きようとおなじように、

「さあ、雪のこどもたち、袋の中へはいっておいで。ここが、みんなの、おうちだよ。」

雪のおだんごは、ひとつだけではありません。

「ほら、あなたも入ってくださいね。みんなでいれば、さびしくなんかないでしょう。」

きよみちゃんは、いくつも、いくつも入れました。

袋の中は、雪のこどもが、いっぱいです。

おしくらまんじゅうしています。

「おかあさん、見てちょうだい。ほら、雪のこどもが、

袋の中から、そこを見ているわよ。」

きよみちゃんは、お部屋でこたつにあたっている、おかあさんのところへ、ビニールの袋をもって、はしってきました。

「おやおや、つめたかったでしょう。はやくこたつへ手をいれて、あたためなさい。そんな雪なんて、まだまだ、たくさんふりますよ。」

あたたかいお部屋へ入ったからでしょう、きよみちゃんのもっている袋から、ぽたぽたと水がおちます。

「ほらほら、なんとかしなさいよ。こたつの上が、ぬれるじゃありませんか。」

そういいながら、おかあさんは、ぞうきんをもってきて、ふきました。

「でも、かわいい雪のこどもだもの。」

きよみちゃんが、おしそうにいますと、

「雪は、たくさんあるんですよ、そこへおいていらっしやい。」

「だって、雪のおだんごだもの。」

「だってではありません。はやく持っていけないと、とけて水になってしまいますよ。」

おかあさんにいわれて、きよみちゃんは、しぶしぶ台所から玄関のほうへいきかけて、ふと目にはいったのは、冷蔵庫。

「そうだ、いつもアイスクリームをいれておくれいとうしつ。」

きよみちゃんは、そおと冷蔵庫のドアをあけると、れいとうしつの一番おくへビニールの袋を、おしこみました。

「雪のこどもたち、ちょっとせまくて暗いけど、しばらく、がまんしてちようだいね。」

雪のおだんごを、すてずにすんだきよみちゃんは、ほっとしました。

そして、わすれてしまったのです。

夏になりました。

しんちゃんと、きよみちゃんが、アイスクリームを、べろべろなめています。

のこったアイスクリームを、冷蔵庫のれいとうしつへ入れようとした、おかあさんが、

「あらまあ、こんなところに、雪のおだんごがあるわ。

ほかのものが入らないからすてましようね。いいでしょ

う。」

といいながら、だそうとしたおかあさんでしたが、きよみちゃんの、かなしそうな顔を見ると、また、そっと入れておきました。

そんな、ある晩のことです。

四、五日まえから、夏かぜをひいていた、おかあさんが、きゆうに熱をだしたのです。

おくすりをのんだり、水まくらもしました。

しかし、なかなか熱は、さがりません。

おかあさんの、まくらもとで、しんばいそうにみていた、きよみちゃんが、いいました。

「そうだ、あれがあった。」

台所から、もどってきた、きよみちゃんの手には、ぶらさがっていたのは、雪のおだんごの入ったビニール袋です。

長い、ものさしをタンスの引き出しに、はさんで、その先に、ひもをつけると、それに雪の袋をぶらさげて、ちようど、おかあさんの、おでこのところへくるようにしたのです。

「まあ、つめたくて、きもちのいいこと。」

熱であかい顔をしていた、おかあさんは、おでこの上の雪を、めずらしそうに見あげながら、うれしそうです。

みんな「へーっ。」と、かんしんしました。

つぎの朝、すっかりげんきになった、おかあさんが、だいじそうに、あの雪のおだんごの入った——もう、おだんごはとけて、水になっていましたが——、ビニールの袋をもって、つぎのような、おはなしをしてくれたのです。

「ゆうべは、この雪のおだんごのおかげで、いいきもちで、ねられたのよ。

よなかに、ふつときがつくと、そこに、だれか立っているの。そして、まっ白な雪のように白い手が、ぽうーっと、うかんでね。

こっちにむかって、やさしく手をあわせているの。

その手は、まるで宝石のように、すきとおって、それはそれは、きれいだっただわ。

ふしぎなことが、あるものだなあーって、おもっているうちに、その白い手は、すうーっと、きえてしまったのよ。

それからは熱もさがって、けさは、こんなに気分がいいの。

あの白い手は、なんだったんでしよう。

おかあさんの、おはなしをききながらきよみちゃん は、はっと、おもいました。

「おかあさん、それは、雪のほとけさまよ。そうにちがいないわ。雪のこどもたちが、ほとけさまになってきたのよ。」

「ほうとにそうだわね。きよみちゃんに、だいじにしてもらった雪のこどもが、うれしくて手をあわせていたんだわ。どうも、ありがとうって。」

おとうさんも、

「そうだね。そのおれいに、おかあさんの熱も、とってくれたんだ。」

しんちゃんも、

「それなら、ぼくは、アイスクリームを、だいじにしまっておいてあげようか。よなかに出てきてくれると、いいんだけどなあ。」

といって、わらいました。

水のはいったビニール袋をもって庭へ出たきよみちゃん

んは、水を土の上へ、そっとこぼしながらいいました。
「水になった雪のこどもたち、さようなら。また、らいねんのお正月に、あいましょうね。そのときも、おだんごにして、袋へいれてあげましょう。」

あのときの、やくそくどおり、ことしのお正月も、きよみちゃんは、雪のこどもと、あそぶことが、できたのです。

まだ雪は、ふっています。

白い手、白い手、白い手が、みえる
手をあわせた、やさしい、白い手
雪の、こどもの、手だろうか
み仏さまの、手だろうか
みんなを、つつむ、手だろうか

(おわり)

表紙のことば

土屋 正男

今月号から久住静雄先生のあとに続いて表紙を受持つことになりました。よろしく――。

一陽来福。新しい年は明けても春は名ばかり風はつめたく樹木の芽もまだ固い。風は冷たく霜は消へずとも凍土の下では駉蕩の春への活気は確実に動きつつある。刻ときのうごき。

刻一刻。石猿は未だ生れず、乾坤雲静かに華果山上は平穩無事。

この度「浄土」の表紙を担当して頂くことになりました土屋正男先生は、日本版画院同人・理事、七彩会会員等、版画界では広く活躍されています。棟方志功画伯の直弟子で、この道三十有余年というベテランです。趣興をこらした毎月の表紙版画がますます楽しみです。

なお、この版画絵は豪華額縁に納めて、限定販売いたします。送料は到着払いで二五〇〇〇円です。ご希望の方は弊会まで前金でお申し込み下さい。



サル年に寄せて

いま
枝 二 郎

(大正大学助教授)

○ 「申」には「猿」が当てられ、サルと訓まれているが、「サル」ということは古来忌む風があつて、「エテ」と

称することはよく知られている。いうまでもなく、「サル」は「去る」に通ずで、特に婚礼に関係ある時や所などでは、「サル」という発音をしてはいけないと言われている。サルということばはそのものに一つのハンデがある上は、動物の猿に因む逸話にも、歓迎されないものが多い。

その代表的なものが「猿蟹合戦」ではなからうか。勸善懲惡の意味が含まれていて、懲らしめられる猿は、

ずる賢いものの象徴的役割を果たしているように思われる。したがって猿智慧ということばがあるように「智が勝れている」意味が、すでに猿にはめこめられているのであろう。

その智慧を働かせた一つの姿が、真似になる。猿真似などということばは、智の勝れている点が真の智でないことを示しており、いわば浅薄な智を働かせていることになる。それは動物の猿のしぐさを巧みに複合させたものである。このような意味で猿を軽侮して、それを人間に擬えた話がある。

楚の項羽が、沛公即ち後の漢の高祖と秦を倒したとき、或る人が項羽に説いた。「関中は險難な山河によっ

て阻まれた四方要塞の地で、そのうえ土地は肥沃です。

ここに都すれば、天下に覇をとえなることができるとしよう」と、しかし、項羽は秦の宮殿が焼けて破壊し尽くされた焦土の荒涼たる情景を見、郷里に帰りたい気持ちが募り、しかも、秦を倒した功を示したい思いもあって、「富貴な身で故郷に帰らないのは、錦を着て夜道を歩くようなもので、せっかくの成功を誰も知ってくれないだろう」と、いった。或る人が「世間の人が『楚の人間は、狼が冠をつけているだけだ』というが、やはりそのとおりだ」といった。これを聞いた項羽は怒ってこの人を烹殺してしまった。

この話はよく知られているが、この原文の「沐猴」は猿である。猿・猿・狙・獼もみなやはり猿である。ただ、年齢・大小・雌雄などによって呼称が異なる。

そこで、猿に眼を向けてみよう。

道教の重要な文献に『抱朴子』というのがある。その中には引用した文献が数多見られるが、『玉策記』という書を引いて、「猿の年寿が五百歳になると獲になり、

それが千歳になると老人になる」とある。これは猿の寿命の長さを表している。『抱朴子』には、また「猿と狼が八百歳になると、化して獲になる」とあり『古今注』には「猿が五百歳になると、化して獲になる」とあり、『博物志』にも同様の記事がある。いずれも猿の長寿が述べられており、その意味では、猿が忌むべき動物にはなっておらず、長寿のめでたい動物ということになる。

寿命のことでいえば、『抱朴子』に、「人の体内に三尸^しというものがあって、三尸は無形ではあるが神霊鬼神のたぐいで、人の寿命を支配している。三尸は庚申の日の到るごとに、天に上って人間の罪過を司命に報告する」とある。司命とは司過の神ともいわれ、天に在って人間の寿命を司どるが、それに報告する三尸昇天の日を庚申としているところに面白さがある。これも申が寿命とかかわりを持っている話の一つである。このことは更にサルに或る種の神秘性を感じていたからであろうと思われ、猿にまつわる怪奇な話しが、中国の古典には、しばしば見出し出される。

前述の庚申は、日本の民間信仰にも融合して、青面金剛を祭る庚申塚やお堂が全国に散在しており、庚申待ちや庚申講という習俗が、わが国の習俗のように、今日もなお行われている。この変形したものが三匹の猿の像、すなわち「見ざる、言わざる、聞かざる」の所謂三猿像で、庚申塚の石に彫られてあるのをよく見かける。一説には、天帝が、人びとの悪事を見ないでほしい、知らせないでほしい、聞かないでほしい、という人間の願望を象徴しているともいう。

川柳に「五右衛門の親、庚申の夜を忘れ」とあるが、これは、庚申の日に生まれた人はよくないという言い伝えから詠まれたものである。しかし、後には全く正反対に、よい人であるという言い伝えもあって、豊臣秀吉は庚申の生まれであると伝えられている。こうした俗信の根強さは、庚申の日に生まれた子には、庚申の五行思想による「金」にかかわりのある名前をつけ、毒をもって毒を制すの類で、幸運をよびこもうとした傾向もあった。「金太郎、金次郎、鉄之助、かね子」等の名の多くはそれによったものと思われ、夏目漱石の本名金之助もまたそうである。豊臣秀吉は庚申の生まれというばかり

でなく、顔つきからサルと呼ばれたというのは、生まれた日がサルであるのと合わせて興味深い。

天孫降臨にサルタヒコの神（猿田彦神）が現れて道案内の役をつとめた話はつとに有名であるが、これは、後世神社祭礼のときに、行列を先導する役の者の名になっており、猿田彦神の先導的役割がクローズアップされる。

猿の神秘性や怪奇談は枚挙に遑がなく、『太平広記』という中国の宗代に編集された書物や、六朝時代の志怪小説と呼ばれるものの中にも数多くとられている。

洛陽に李氏の宅と呼ばれる旧宅があった。この邸宅は凶宅といわれ、人びとは誰もその家に住もうとはしなかった。唐の開元年間、ときは玄宗皇帝の治政下で天下泰平の御宇、王長史という者が「凶宅というのは信じられない。そもそも運命は天にあるもので、宅にあるものではない」と言って、この家に家族とともに住まうことになった。或る秋の夜、庭にもの悲しい、それでいて妙なる声が聞こえてきた。長史が庭に出てみると、黒衣を身

につけた背の高い人影があったので「誰だ」と声をかけて十分に近寄ると、その人は長史の肩をたたいて逃げ去ってしまった。すると長史の肩にできものができ、長史はこれのできものために苦しんだ。日数が経って漸くこのできものはひいた。そうして何日かたった或る夜、またも庭先に、先日と同じようにもの悲しい声がしたので、今度は弓の名手として知られていた弟に、そこに現れた黒い影めがけて矢を射させると、みごと命中し、ギヤツという声とともに、その黒い影は厩の屋根の上の方に跳んで消えた。翌朝探し廻って調べたが、何も見つからなかった。その後、この宅には凶宅といわれるような災異は何も起こらなかった。やがて半年ほど経ってから厩の改築することになり、そのとき屋根裏に猿の死骸のあるのを見つけた。その死骸の脇腹には矢が刺さっていて、それは長史の弟のものであった。

この怪談は、矢によって魔性が倒されたことになり、猿の怪奇な面が現れているのと併せて、それにうち勝った話になっている。

猿の声のものの悲しさが、あるいはこういう話しに結びつく要素をもつにいったのであろうか。白楽天の「南

秦の雪」という詩に、

往歳曾て西邑の吏となり

駱口より南秦に到るに慣る

三時雪冷やかにして多く雪を飛ばし

二月山寒うして少しく春あり

我は旧事を思いて猶惆悵たり

君は初めて行を作し定めて苦辛ならん

仍愁猿に頼りて寒くも叫かしめじ

もし猿の叫ぶを聞かば更に人をして愁えしめん

と猿のき声のものの悲しさが詠まれている。



こうして猿を眺めるといかにもよいことは少ないように見えるが、『西遊記』で知られるように、孫悟空の存在と働きのもつ大きさは、やはり猿のもつ役割の無視できないことを物語っている。豊太閤や漱石のごとく、一世を風靡する大人の相は、サル歳の強運に連なるものであろう。



念佛ひじり三國志

(空九)

—法然をめぐる人々—

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

尊長僧都のかたわらに童子が端座して、じっと大人どもの話に耳を傾けている。

肌色は透きとおるようだ。烏帽子からのぞく髪は濡れたように、つややかであった。女人かと思いがう美形である。

尊長僧都の「愛童」であらう、と明遍は察した。

「入り乱れてとは、衆人の前でまじわるのでございますか」

とつぜん童子が言葉をさしはさんできた。涼やかな眼

もとに、恥らいの色もかすめない。

童子奴が！ 僧都とのただれた日常に毒されおって！ 不潔さに眼をそむけなくなった。

だが尊長僧都は楽しみに受け止める。

「いずれ道義心の一片も持ち合わぬ専修のやからでござる。他人の眼があらうとなかろうと平気で野合するでしょう」

一目を置いたような口調でもあった。

「そんな席へつらなってみたいものですね」

「何をおっしゃいますか」

「しかし、法座での野合が事実だとしたら、それだけで

も専修のやからを、からめ取ることが出来るでしょう」

「下民（げみん）相手では、そうもまいりますまい」

「だから、然るべき身分の者が混入しておれば……明遍どの」

童子は名指しで鋭く凝視してくる。

「え……」

「いまのお話、事実なのでございますね」

明遍はたじろぐ。

誇張だからだ。この座を湧き立たせる「影法師」の追

従だ。

でも今更引っこみはつかなかった。

「無論、事実です……僧都、こちらはどなたのですか」

童子の正体を訊き出す権利がある。ここまで「売っ

て」しまったからだ。

「未だご存知なかったな。こちらは伊賀のお局さま」

「伊賀のお局さま？」

「院の御寵愛、最も深いお局じゃ」

明遍は、後鳥羽院の奥向きに、未だ通じていなかった。

伊賀局は白拍子の出身で、亀菊とも呼ばれた。十八歳と若かったが美色と才気は天下一品、後鳥羽院が溺愛し

前号のあらすじ

京都西山善峰寺は、慈円僧正の住寺であったが、明遍はそこで後鳥羽上皇の腹臣、西面ノ武士三浦秀能に会っている。この男は、お歌所の寄人も兼ね、風流公卿としても知られていたが、その策士振りはまた人知れずすごいものがあつたのである。ある日明遍は、この秀能に連れられて、京都鴨川の河東、旧白河御所の一角にある最勝四天王院という小さな祈願所に案内される。そしてここではじめて、後鳥羽院と面対することになる。その豪放磊落な人格にいたく感銘するとともに、この四天王院を預かる執事尊長僧都の存在がまた、明遍の心を動かした。

その頃また東山獅子カ谷では、安楽や住蓮の別時念仏会が盛んであつた。そんな折明遍自身は、まだ念仏への信仰を未だ確立しないままに、法然上人の専修教団のまわりをうろついていた。

ている女性なのであつた。

このような男装、童子スタイルで出歩くのも後鳥羽院の趣向かも知れない。

「お局さまが、軽卒にそのような場所へ出入りなさつたら、まともにお身体をねらわれますぞ」

尊長僧都が好色な笑みを浮かべて、へつらう。

「まともに妾の身体をねらうんですって。誰が？ 専修

＜尊長僧都と白拍子亀菊＞



のやからがですか」

「中原の師広などは評判の美男でございます。安楽房と称して入道をよそおってはおりますが、なかなかどうして手れん手くだは……仁和寺の小御所、その女房どもは誰彼なく彼になびいてしまったとか」

「小御所の方々が？ 坊門の母公さままでしょうか」
坊門局と聞いて、亀菊の涼やかな眼に鋭い光りが点ぜられた。

「さあ、母公さまでは？」

いつか密議の座は、淫らな話題で賑わいはじめていた。いかにして専修の徒輩を摺伏するか。この主題が、彼らの乱行沙汰から「乱行」そのものに低迷してしまっただのである。

尊長僧都も、武人三浦秀能も、その方面にはしたたかな手腕と体験とを持ち合わせていたようである。いわんや白拍子上がりの亀菊では、話題にこと欠かなかった。禁裡の女御たちの品定めから、その愛慾にまつわる噂話へ、と最勝天王院の宝前には淫靡な雲が立ちこめた。

明遍は高階栄子を思い出さずにはおれなかった。彼が生涯で触れ知った唯一箇の女体である。それも若

き日と老いさらばえた晩年……比較してみる気はないが、明遍にはあの淀の川舟の中で唐突に結ばれた老女が強い印象となっている。体験年次の新しさだけでも言えなかった。

やはりそこには廟堂の主流を泳いできた女の「權威」がものを言っているのではなからうか。

禁裡の愛慾——そこには必ず性を離れた権力や身分素姓が付きまとう。女体を掌中にしたことは、同時に彼女の背景となつてゐるものを征服したことにもなるのだった。それが、公卿貴族の男たちの血というものだ。そして明遍はおのれの体内にも同じ血が流れているのを認知しないわけにはいかなかった。

やがて、伊賀局は立ち上がった。

「もはや夕暮れも迫りました」

帰館しなければならぬ、と言う。

「手前がお送り致します」

武人の秀能が応じた。

「いいえ、それは明遍どのに」

焉然と視線を流してくる。立ち姿にこぼれるような色感がある。

「そうか。明遍どのが最もふさわしい」

ふくんだような言葉が尊長僧都の口から洩れた。いったいなぜ自分が一番ふさわしいのであるか。白河御所跡を出る。

供の者も興もない。

だが、烏帽子に腿立ち、わらじ履きの童子姿である。

往きずりの都人の誰がこの童子を後鳥羽院の寵妃と見抜くであろうか。おそらく伊賀局亀菊は、この軽装で都大路を歩きまわっているにちがいない。強盗の逮捕を深夜わざわざ見物に出かける豪毅な後鳥羽院にふさわしい愛人だったかも知れない。

王家の中に新しい血が流通しはじめた、と言えるであろう。

「お住まいはどちらで？」

明遍は前をゆく亀菊に声をかけた。

「院の御所ではありません。西洞院姉小路」

「西洞院姉小路……」

「たしか以前、明遍どのが住んでいたところではありませんか」

ふりむいて亀菊は悪戯っぽい笑いを投げる。

尊長が洩らした意味が解明できる。

二

西洞院姉小路。

信西入道の邸である。明遍自身が幼い日育ち、平治ノ乱突発とともに去ったなつかしい旧跡である。

あれから幾組の貴人が移りかわって住んだことであろう。

往年の唐国ぶり、板葺きの上にいちめんの青竹が編みこまれた青色青光の建築物。大地を舐めんばかりの反りの深い廂……明遍は広い敷地の空間に、幻の楼閣を思いうがいている。

すでに痕跡は消え失せていた。

広い敷地の空間、そうなのだ、建物らしいものと言っては、奥詰まりに石を積み上げた倉まがいがあるだけだ。それも丈けばかりがいやに高い。

亀菊はその石塔へまっすぐ向う。

「あれがお住居ですか」

「はい。粗末なものでございます」

「院がお造りになったので」

「皆に似ていませんか」

言われればそのとおりである。そこで初めて気づいたのだが、築土の厚みや高さも、なみの屋敷の二倍はあるう。楼門も太い角材や金属を用いた堅牢な造りだった。

「兵乱にそなえてですか」

「院はこうした別邸を、洛中の各所にお造りでございませう」

後鳥羽院が志向しているものが読み取れるようである。

それでも石塔の内部は、贅をこらした部屋が配してあり、美しい侍女が出迎えて、禁裡の匂いをつたえた。

高価な打ち菓子を饗応し、湯茶をすすめた。

「仁和寺の母公さま、ご存知でいらっしゃいますか」

活発な童子から、烏帽子を脱いで女人に立ち戻った亀菊は、女らしいしとやかさで茶をすすりながら訊いてきた。

「いや、坊門の姫君とは聞いておりましたが、未だお目にかかったことはございませんね。ただ……」

うっかり事をつないでしまうような接続語が、おのれの意志と無関係でこぼれ出る。

明遍の最大の弱点だった。これあるがために、口説の

徒」という烙印をおされてしまうのである。

「ただ、何でしょうか」

「仁和寺の母公さまのもとへ出入りする僧に知り合いがないことはありません」

「僧なら、なおのこと都合がよろしい」

「何かご用でも」

「近ごろの母公さまが、どのようにお暮しか、聞き出して欲しいのです。それと。さっき尊長僧都も申しましたが、専修のやから、その安楽房とやらと、どの程度の接触があるのか」

もはや亀菊自身の意志がしやべらせているのではあるまい。後鳥羽院の声だ。

「わかりました。出来得る限り、聞き出してまいりましょう」

確約する明遍。「影法師」のシルエットはいよいよ鮮明に政治の断面へ投影されてくることを約束している。

「申し添えておきますが、院のみ心には企らみも野望めいたものも一切ございませぬ。なるべく沢山のことをお知りになって、京師と鎌倉とが対立するこの複雑な政情に平和安定をもたらしただけなのですよ」

白拍子出身の、色情だけを売る女性とは到底思えない。才気渾発なばかりか、確固たる見識も持っているようである。

ずっと後のことになる。

この亀菊は摂津の庄園をめぐって北条義時と激しく争う。それが直接の導火線となって東西の手切れ、承久ノ変が勃発する。尊長や三浦秀能も官軍方の帷幕で目ざましい働きをする。

ただし、戦争は関東二十万の大軍に蹴散らされ、後鳥羽院は隠岐へ遠島させられる。

——帝といえども天下に兵乱を招けば、遠島流罪は当然の処置だ。

北条武家政権は、武家の倫理でこの日本列島を隅々まで支配することになる。隠岐へ流罪になった後鳥羽院、結局この浪荒い北隅の島で生涯を閉じるが、その最後まで身辺に侍ったのが伊賀局亀菊だった。

ただの色恋の沙汰ではあるまい。院にとつてはつねに心の杖ともなる永遠の伴侶だったにちがいない。隠岐島でなお歌への情熱を失わず、「新古今集」を推敲している院の生活意欲に、亀菊の存在を見忘れてはなるまい。

言ってみれば、後鳥羽院に無限のエネルギーを湧出させる発光体だったのでもあろう。

十余年も先の話である。

未だ十八歳だった伊賀局亀菊。この建永年間、後鳥羽院の意志をどうかがい知って、どのような行動に出ようとしていたのであろうか。

明遍が別れを告げようとして立ち上がったとき、亀菊は思慮深い眼を向けながら、もの静かに言った。

「道忍と申す僧がおります」

「道忍……」

「出家前の名は中原親能と申す人です。坊門家とどれだけ深い関係にあるのか。それと専修の指導者である安楽房中原師広とはどんな結縁か、ついでに聞き出して欲しいのでございます」

「中原親能の道忍ですね」

「よもや母公さまはご存知ない、とは申しますまい」

先まわりしたように言い添えた。

だが、明遍には仁和寺の母公、つまり仁和寺親王の生母である坊門局とじかに会う手だては未だ出来ていないのである。

中一日を経て明遍は、太秦の広隆寺へ出かけてゆく。

盲目の琵琶法師念仏ひじり生仏に会うためであった。

明遍が坊門局との接点として思わずも洩らした「僧」こそ、この生仏だったのである。

生仏は以前のまま広隆寺の僧房にいた。集ってくる僧俗に六時礼讃を教えているという。

「その六時礼讃だが、仁和寺の母公さまは未だ……」

「いや、近ごろは身を慎まれていらっしやるようです」

「身を慎しむとは？」

「ご承知のように妹君が鎌倉將軍家へお興入れになっております。母公さまのお立場は微妙です。ことに先ごろまで仁和寺御所へ六時礼讃に指導にきた安楽房どのとは北条家と深い関係で結ばれています。彼に接近することは、さまざまな意味で誤解を招きます」

盲目ではあるが、生仏は適確に現状や人間の動きを把握している。

「此処へは参詣にお出かけになるかな」

「はい、毎月の十二日、弥勒さまに御参籠なされます」

「弥勒菩薩にのう。毎月の十二日か」

あと四日で、その十二日だ。出直してくるのが得策

だ。出会いはやはり自然な方がよい。

しばらく四方山話をしたあと、明遍は広隆寺を辞した。

三

弥勒菩薩半跏思惟像。

現代ではそう呼ばれている弥勒像だ。

片脚を膝に組み、悩ましげに首をかしげている。せんない女人まがいの長い指が空間に遊ぶ。

この国でも、いやアジア大陸でも一寸見かけにくい姿態である。西欧の情感がその体線にあふれていた。

と、観察するのは、やはり近代の眼であらう。余りにも数多く東洋的な仏像を見てきたためだ。また、この平安期までの仏像が大半、焼亡によって失われてしまったためだ。当時の人々にとって、この弥勒像にエキゾチズムを感じることにはなかったであらう。

明遍はほの暗い堂内に端座して、じっと瞑想をこらしている。やはり堂内へはいると、雑念は消え去る。いちずに仏の幻想へ溶けこんでゆくことが出来る。永年におたる修法の験であったか。

その雑念とは、同じ堂内の最前列に坐る女人たちの背

へ注がれる視線にこもる。仁和寺の母公、坊門局とその侍女たちである。

いまはもうそんなうしろ姿は視野になかった。

広隆寺の僧たちがとどめる「理趣経」の早読みが、ころよいリズムとなって仏の幻想を、より深く、より広々と明遍を包みこむ。

弥勒は、もの哀しい星を背負った仏弟子であったそう
な。

釈尊の膝下におわしたとき、夕暮れになると必ず全身を苦痛がおそってくる。悶え苦しむ若い弟子を、釈尊はこう言って慰めたそう。

「いまこの利那、お前が苦しみ悶える利那、この世の痛める者傷つける者は、その利那だけ苦しみから解放されている。つまりお前はもろもろの人々の苦を一身になっ
ていることになる。弥勒よ、その苦悶を悦びなさい。
感謝しなさい」

弥勒は涙で濡れた眼で師を見つめる。

「そうですか。私が苦しんでいる間だけ、世の人々は苦しみから逃がれることが出来るのですか」

しかしこの弥勒に、天は長い寿命を与えなかった。師

＜弥勒菩薩幻想＞



の釈尊に先立って、彼は死んでゆく。その臨終、釈尊は五十六億余年後に必ず復活し、救済仏となって出世してくることを予言する。

明遍の幻想は、救済のために復活してきた弥勒の相が堂内の半跏思惟像とダブって瑞雲たなびく莊嚴の世界にひろがるのであった。

仁和寺の母公、坊門局の幻想はどのような色彩や光りにいろどられていたであろうか。あるいは、悩ましげな現前の木像に彼女はおのれの姿を映し取っていたのかも知れない。

僧たちは読経を終えた。いっせいに立ち上がり三拝九礼をおこなう。参籠者たちもこれにならった。

僧たちは弥勒堂をあとにする。参籠者たちも午後の堂外へ出た。

狩衣を羽おりかける坊門局たち。

明遍は歩み寄った。

だが、声をかけるのをやめた。一瞬早く前をゆく僧形の男がふり向いて女人たちに話かけたからである。どこかで見おぼえのある顔だった。

「これは仁和寺のご母公君ではござりませぬか」

野太い声がひびく。

那智ノ検校ではないか。

明遍は、最勝四天王院で同座したその色黒い顔を思い浮かべていた。

「……」

坊門局も顔見知りなのであろう。狩衣の下から、つましく会釈している。

「お話したいことがございます」

と言って那智ノ検校はあたりに眼をくぼった。すぐに明遍の存在に気づいた。

一瞬とまどった検校の顔は、次の言葉を発したことで、なごんだ。

「さよう。明遍僧都にも聞いて頂こう。高野の問題じやからじゃ」

「高野……」

このところ、さっぱり出かけなくなった高野山にかかわることだという。

「高野の所領をめぐる紛争で、坊門どのは鎌倉へ調停の使者を送られたそうですな。御室の法親王の令旨まで添えて」

立ち話で、づけづけと問いかけてくる。

坊門どのは、母公の実父大納言信清のことだ。御室の法親王は彼女が生んだ仁和寺の法主である。

「ご政情のことは、とんと存じ上げませぬ」

声は小さいが、きっぱりとした答えを坊門局は投げ返す。

まさしく無礼な那智ノ検校の態度と言わねばなるまい。そんな話なら坊門家へなり、御室の仁和寺へ正式に申し出ればよいのである。わざわざ参籠先の広隆寺まで出てきて、道端の立ち話にすることはないではないか。「いや、大納言にも、また法親王にもおうかがいしたのです。ところがどちらもご存知ない。御母公君のお胸だけにある問題だと言うことでしたので」

「さあ……」

途方にくれる坊門局。

那智ノ検校はたたみかけるようにしゃべり続ける。

「紀州や和泉の守護職が高野の寺領を荒らしている。という訴状ですが。じつはその中にわが那智までがふくまれているのです。たしかに那智が現有する有田の庄園も、かつては高野の所領でございました。しかし拙僧

が、検校職を与えられた折、院から正式に拝領したもので、訴えられるいわれはございませぬ。誰かが高野を煽動し、また御母公君にまで奸言をもらしたに相違ありませんぬ」

修験者上りの那智ノ検校は粗野である。後鳥羽院の信頼と寵愛を受けて、いよいよ尊大さを加えたようである。

明遍は見兼ねた。

「検校どの。そのような話を路傍でなさるのはまずからう。あちらへ参ろう。いま僧房の一室をあげさせる。じつくりとお話合うのがよろしい」

生仏の宿房だ。

当然、今日はそこで坊門局と会う手筈をととのえていたのである。生仏も待っている。

「うむ。どこへでも参る。とにかく急ぎ解決を要する話じやからな」

激昂した那智ノ検校は、僧房へゆく道すがら言葉も止めようとはしない。

「北条の武士どもが有田の庄園へはいりこんできて、腕づくで那智の守護人を追い出したのじゃ」

「……」

相変らず坊門局は、一言も口を開こうとはしない。

「聞けば鎌倉へ下った使者は、中原親能とか申す男。掃部入道道忍。背後に専修の徒輩が糸を引いておるといふ噂じゃが」

明遍はハタと思いあたった。

あの日、尊長僧都や亀菊が気にしていた問題とばかり一致する。彼らも道忍という入道と安楽房との関係を探ぐって欲しいような口ぶりではなかったか。

今や後鳥羽院及びその側近は、高野山の所領をめぐって鎌倉へ使者を送った仁和寺の母公や坊門家へ疑惑の眼を向けているに違いない。

前を歩く狩衣を羽おった坊門局のうしろ姿が可憐とも哀れに、明遍には見えた。

後鳥羽院の寵はすでに薄れ、わが子仁和寺の法親王を抱えて、生家坊門家の運命までもになって、このむずかしい政局を彼女は一身で乗り切ろうとしている。鎌倉將軍実朝へ嫁した実妹、そこから送りこまれてくる風波は、京都の政局を微妙にゆさぶっているようでもある。

(つづく)

新年賀謹

〒170 東京都豊島区西巢鴨三—二〇—一 大正大学 電話(〇三)九一八—七三十一代表	埼玉工業大学 松川文豪	淑徳高等学校 里見達人 〒174 東京都板橋区前野町五—一四—一	東海高等学校長 滝俊立 〒496 津島市神守町 阿弥陀寺住職 社会福祉法人 神守保育園理事長	鎮西高等学校長 真和中・高等学校長 上田祐規 〒862 熊本市九品寺三—一—一	京都市家政短期大学 学長大橋俊有 (本年四月より、京都文教短期大学に校名を変更します)	〒174 東京都板橋区前野町五—三一—七 学長長谷川良昭 淑徳短期大学 電話(〇七五)四九一—二二四一代表	〒530 大阪市北区同心一—四—八 九品寺中 善導大師遠忌 法然上人降誕慶讃事務局長 漆間純成 西福寺 稲岡覚順 〒332 川口市西川口三—二四—一三 祐天寺 巖谷勝雄
---	----------------	--	---	--	---	--	--

謹賀新年

無量山 伝通院 住職 大河内秀敏	稲田 稔界	回向院 本多 清敏 〒130 東京都墨田区両国二―八―十	九品仏浄真寺 清水 順碩 東京都世田谷区奥沢
蓮勝寺住職 柴田 敏夫	称名寺住職 須藤 隆仙 〒040 函館市船見町一八―一四 電話(〇一三八)二二―一五七八	中島 真哉 青山 梅窓院 〒107 東京都港区青山二―二六―三八	野呂 幸進 教安寺 〒210 川崎市川崎区小川町六―二 電話(〇四四)二二―四九四六
〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一 清岸 寺 原口 徳正	華陽院 堀田 良謙 〒420 静岡市鷹匠二―二四―一八 電話(〇五四二)五二―三六七三	〒030 青森市本町一―一―一二 正覚寺 楠美 知行	光運寺 飯田 信弘 〒510 四日市市中部三―一二

新年賀謹

廣隆寺住職

谷地 益雄

〒045 岩手県花巻市四日町一丁目

晴雲寺住職

塚田 弘導

〒254 平塚市立野町六一五

浄土宗鎮西流根元地

聖光寺

小林 忍戒

龍泉寺住職

瀧沢 教夫

〒405 山梨市市川二二五一

お骨仏の寺 一心寺

高口 恭行

〒543 大阪市天王寺区逢阪上之町一五五
電話(〇六)七七一〇三七一(代)

知恩院布教師会九州支部長

聖徳寺住職

金子 貫達

〒850 長崎市銭座町四一五九

紫野 西向寺

〒603 京都市北区紫野東蓮台野町

新善光寺住職

太田 隆賢

札幌市中央区南六条

浄土宗新潟教区長
照専寺住職

川端 大祐

〒947 小千谷市寺町二八五一

浄土宗議会議員

光明寺住職

山口 諦存

〒573 明石市鍛冶屋町五一二〇

山喜房 仏書林

浅地 康平

〒112 東京都文京区本郷五二二八一四

大道 社

〒102 東京都千代田区飯田橋

一一一一六

新年賀謹

東京都文京区本郷一―八―三 昌清寺 住職 服部仙順 電話(〇三)八一―一三三七	檀王法林寺 だん王保育園・児童館 信ヶ原良文 京都・三条大橋東詰	光明寺住職 白幡憲佑 横浜市南区庚台(久保山)	西住院 戸川靈俊 京都市左京区黒谷町三〇
近龍寺住職 松濤弘道 〒328 栃木市万町二―四 電話(〇二八)二二二―〇八〇二	芳泉寺 柳楽真純 社会福祉法人大慈会・かんぎおん 〒386 上田市常磐城三―七―四八	浄土宗議會議員 安国寺住職 大田秀三 高崎市通町九〇 慈光ビル	金田明進 〒302 取手市白山二―九―二八 弘経寺

「浄土」購読規定	会費一カ年 金二、五〇〇円 (送料不要)	浄土 四十六巻 正月号	昭和十年五月二日 第三種郵便物認可 昭和五十四年十二月二十五日 印刷 昭和五十五年一月一日 発行	編集人 宮林昭彦 発行人 佐藤密雄 印刷人 関 二三男 印刷所 長谷川印刷機	東京都千代田区飯田橋一―十一―六 発行所 法然上人鐵仰会 電話東京二六二局五九四四番 〒103 振替東京八―八二―一七番
-----------------	---------------------------------	--------------------	---	---	---

新年賀謹

總本山

知恩院

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈 法

大本山 善光寺大本願

法主 一条 智光

(昨夏火災の折には、温かき御見舞を頂き有難く御礼申し上げます)

法然上人御降誕地

二十五霊場第一番

誕生寺

岡山県久米郡久米南町里方
中国従貫道路大阪より二時間

浄土宗東京事務所

浄土宗宗務庁

大本山 清浄華院

法主 高 畠 寛 我

大本山 増上寺

大本山 善導寺

鎌倉大仏殿 高德院

佐藤 密 雄

法主 藤井実応

法主 宮本文哲

〒248 鎌倉市長谷四―二―二八

大本山 金戒光明寺

大本山 光明寺

滋賀 福泉寺
敦賀 西福寺

法主 稲岡覚順

法主 石井真峯

鵜飼 隆 玄